

(二十四) 承前

抜刀はしたが、間宮林太郎、斬りかかることができない。

眼の前のあまりに奇怪な光景に、魂を奪われてしまっている。

仁左衛門は、犬のように四つん這いになっている。

しかし、背中が下、腹が上を向いている。

両手を床についているのだが、その指先は後ろに向けられている。

両足を床につけたまま、仰向けにのけぞっていつて、両手を床についたかたちだ。

着ているものの裾がはだけて、股間から、おぞましいものが天を向いて立ちあがっている。

長さ、一尺半はあろうかという男根であった。

まるで、犬の尾のようだ。

「犬神法で作った犬神が憑いたのですね」

遊齋は、二胡を置いて、左手に瓶子を握って立ちあがった。

「お妙を殺し、その後、犬神を、放って、おくわ、けにもゆきま、せぬでな、自身に憑け、て飼う

ことに、したので、すよ……」

もはや、人の声ではない。

動物が、無理に、人の言葉をしゃべっているような声であった。

仁左衛門の鼻が尖り、牙が伸びている。

「この赤い櫛を使って、大神法をやったのですね」

「おう、そうよ、そ、その、櫛を使う、た、たの、じゃああ……」

仁左衛門の上顎から、

ぬうつ、

と、二本の牙が伸びた。

「と、とらまるううううををををを、くくく首まあああああでええええ、う、埋めてよおおお、そのお妙のおおおお櫛を見せてよおおお、叩いたのじゃ、うううううう飢えさせええええええたのじゃああああ……」

仁左衛門が、じわりと前に出てきた。

「くくくく苦しませてよよよよ、とらまあるを、いじじめてよおおお、そのたびびびびに、その櫛ををををををををををを、臭いを嗅がせせてよよ、くくく櫛のぬぬぬしにに恨みを抱かせてよ、そそそれで、ととらまるの、く首を斬って、いいい大神をを解き放ったのよよよ……」

しゃべっている仁左衛門の眼が、くるりくるりと裏返って、黒眼になったり白眼になったりしている。

髪はほどけて、垂れ下がっている。

「なあああんで、お妙はああ源治郎を、殺したのかああああのう……」

しゃべりながら、仁左衛門は泣いている。
血の涙がこぼれている。

「わわしゃああ、好きだったにようう。愛しゅゅゅゅゅ思うてえええいたによおおおお……」

泣きながら、逆さになった首を、左右に振っている。

そのたびに、髪が、ざわんざわんと揺れる。

「しゃああああっ!!」

吼えた。

たまらず、

「ちえいっ!」

間宮林太郎が斬りつけると、その刃をかわして、仁左衛門が跳びあがり、天井に四つん這いにして、

ざざざざざ、

つと、不気味な速度で這った。

「間宮さま、こちらへ——」

遊齋が、間宮林太郎に声をかける。

「それは、ただの犬でも人でもありませんよ——」

間宮林太郎が、青褪めた顔で、唇を噛んだ。

「くひひひひひひいひいひいひいっ!」

天井で、仁左衛門が笑った。

「くけっ!!」

仁左衛門が、天井から間宮林太郎に向かって跳びかかってきた。
間宮林太郎が、逃げる。

間に合わない——と見えた時、
ぴしゃり、

と、仁左衛門の顔に、何か水のようなものがかけられた。

「えげっ」

仁左衛門が、声をあげて、床の上に転げ落ちた。

異様な臭気が、あたりに満ちた。

獣臭である。

強烈な臭いだ。

遊齋の左手に、栓の開けられた瓶子が握られていた。その中に入っている液体を、今、遊齋が、
仁左衛門の顔にかけたのだ。

「それは!？」

抜刀したまま、遊齋の横に並んだ間宮林太郎が問うた。

「狼おおかみの小便です」

遊齋が言った。

「平賀源内先生ひらがにお願いして、融通ゆうつうしていただきました——」

「な、な……」

「犬は、狼の臭いをいやがりますからね——」

犬は、通常、狼に捕食される生物である。

野良犬が、山に迷い込んだら、数日のうちに狼に襲われ、食われてしまう。

鹿や兎も、狼の小便の匂いのするところへは近づかない。

遊斎は、床の上に、瓶子の中から狼の小便をこぼしながら、丸く輪を描いて自分たちの周囲をかこつた。

「間宮さま、この輪から外へお出になりませぬように——」

「この輪？」

「犬は、この輪の中には入ってこられませぬ故——」

「わ、わかった」

間宮林太郎がうなづくのを確認してから、遊斎は、瓶子を床に置き、杖を右手で拾い、狼の小便で描いた輪から、外へ、軽くひと足前に踏み出した。

続いて、もう一步。

「あがああ……」

仁左衛門の顎が、大きく大きく広がっていた。

その口の中に、緑色に光る火の玉が出現していた。

それが、だんだんと大きく育ってゆく。

「ほわあっ！」

その緑色の光の玉が、口から吐き出された。

暗火魂だ。

それが、宙に浮いた。

大きさ、一尺余りの光の玉だ。

まるで、水しぶきをあげるように、光の玉の周囲に、細い糸のような光が生え出ている。

「ほわあっ！」

「ほわあっ！」

暗火魂が、次々に、仁左衛門の口から吐き出されてくる。

この光に呑み込まれると、身体中の精気を吸われて、木乃伊ミイラのようになってしまう。

全部で三つ。

それが、宙を飛んで、遊齋に襲いかかってきた。

遊齋が、杖の先で、暗火魂を打つと、光を撒き散らして、暗火魂が消滅する。

ふたつの暗火魂が消えた後、残ったひとつが、真上から遊齋を襲った。

ふたつの暗火魂に注意を向けさせておいて、残ったひとつで襲う——そういうつもりで攻撃と

見えた。

それを、遊齋は、右手に握った杖の上部でふわりと受けた。

杖の上部で受け止められて、暗火魂は、そこで静止している。

静止してはいるが、じゅくじゅくと音をたてて、飛沫しぶきのような光の糸を吐き出し続けている。

ふっ、

と、遊齋がその暗火魂に息を吹きかけると、暗火魂が、ふわりと宙に浮いて、仁左衛門の方に向かって、尾を引きながら疾はった。

仁左衛門は、疾ってきた暗火魂を、口を大きく開いて啜え、呑み込んだ。そして、外へ走り出る。

遊齋は、仁左衛門を追って、扉をくぐった。

濡れ縁に立つと、階の下に、仁左衛門の人犬がいる。

逆さまになった顔で、遊齋をねめあげている。

「出番ですよ、右近先生——」

遊齋が言うのと、社の裏手から、

「おう」

と答える声があつて、建物の陰から、如月右近が姿を現した。

(つづく)